

村岡典嗣と広島高等師範学校-村岡典嗣文書所収の 講義ノートをめぐって-

著者	本村 昌文
雑誌名	東北大学史料館紀要
巻	6
ページ	60-72
発行年	2011-03
URL	http://hdl.handle.net/10097/49942

村岡典嗣と広島高等師範学校 —村岡典嗣文書所収の講義ノートをめぐる—

本 村 昌 文

はじめに

村岡典嗣（明治17年・1884～昭和21年・1946）は、日本思想史という学問分野の創始者の一人として知られている。早稲田大学を卒業後、ドイツの雑誌社に勤務しつつ、現在にまで読み継がれる『本居宣長』を執筆・刊行（明治44年・1911）、その後、早稲田大学講師、広島高等師範学校講師・教授を経て、大正13年（1924）4月25日に東北帝国大学法文学部教授に着任し、文化史学講座第1講座担任となった⁽¹⁾。

ところで東北大学史料館には、村岡典嗣文書と名づけられた資料群が所蔵されている。しかし未整理のため、長きにわたって一般公開がなされてこなかった。当該文書に所収されている資料は250以上におよび、その中には活字化されていない貴重な資料も多く含まれている。こうした貴重な資料群を一般公開すべく、筆者を含む有志者が村岡典嗣文書の資料整理を進めてきた。当初の予定より遅延したが、公開可能な段階にまでたどりつくことができた⁽²⁾。

現在、村岡典嗣関係資料は、岩波書店『日本思想史研究』全4冊（以下『研究』と略す）、創文社『村岡典嗣著作集』（全5巻、以下『著作集』と略す）として刊行されている⁽³⁾。しかし先述したように、資料整理の過程で、村岡典嗣文書には上記の著書には未収録の貴重な資料が多く存在することが判明している⁽⁴⁾。その中でも、とくにまとまったものとして注目されるのが、広島高等師範学校時代の講義ノートである。

村岡は大正8年5月に広島高等師範学校に講師として着任し、翌大正9年2月には同校教授となる。大正11年4月には文化史学研究のため、イギリス・フランス・ドイツへ2年間の留学を命ぜられ、同年5月29日に広島を出発、大正13年3月に帰国し、同年4月に東北帝国大学法文学部教授となった。広島高等師範学校赴任から東北帝国大学着任までのおよそ5年間のうち、約2年は欧州留学期間であるため、広島高等師範学校で教壇に立ったのは3年間という短い期間であった。しかし、「広島での日本思想史の講義をするやうになったことは、村岡の後年の飛躍——といふより漸進の第一歩であつた」と指摘されているように⁽⁵⁾、村岡の学問形成において広島高等師範学校への着任は一つの転機であったことは間違いない。

先行研究においても、村岡の大正期における学問的営為の重要性が指摘されている⁽⁶⁾。しかし、『研究』および『著作集』には大正期の村岡の資料がすべて収録されているわけではない。それゆえ、大正期における村岡の学問的営為の全体像を明らかにするために、広島高等師範学校における講義ノートは貴重な資料ということができよう。

また以上の資料は、村岡典嗣研究や近代における日本思想史研究の検討にのみ有益というわけではない。村岡が在任していた広島高等師範学校の関係資料は、現在広島大学文書館に所蔵されている。これらの資料については、『広島大学二十五年史編集室旧蔵資料目録』で確認することができる⁽⁷⁾。同目録によれば、学校の概要や諸規程を記した『広島高等師範学校一覽』、校友会の雑誌や同窓会誌などが所蔵されていることがわかる。しかし、戦災の影響により戦前の広島高等師範学校関係資料は決して多く残されているわけではない。とりわけ、この目録に

は広島高等師範学校における講義ノートは見当たらず、当時の講義内容を知ることはきわめて難しい状況にあるといえる。こうした点からみると、村岡典嗣文書に所蔵されている広島高等師範学校における講義ノート類は、同学校で行われていた講義内容を伝える貴重な資料ということもできるだろう。

以上の点をふまえて、本稿では村岡典嗣文書所収の広島高等師範学校における講義ノート類の紹介を行う。紙幅の都合上、内容の詳細な分析と村岡の学問形成における意義に関しては、別な機会に論じることとしたい。

1、広島高等師範学校について

まず広島高等師範学校について、本稿に関係する範囲で言及しておきたい。

広島高等師範学校は、勅令 98 号により、明治 35 年（1902）4 月に設置された官立中等学校の男性教員の養成学校である⁽⁸⁾。4 月 4 日から 5 月 12 日の間は、校長事務取扱として文部省普通学務局長であった澤柳政太郎が就任し、その後に初代校長として北條時敬が就任した⁽⁹⁾。この澤柳→北條という流れは、奇しくも後に村岡が着任する東北帝国大学総長の就任順と一致している。澤柳は明治 44 年（1911）3 月 24 日に、東北帝国大学の初代総長に就任し、大正 2 年（1913）5 月 9 日まで総長の任にあった⁽¹⁰⁾。澤柳が京都帝国大学総長に転任するに伴い、その後任として北條が第 2 代東北帝国大学総長となったのである。

村岡が広島高等師範学校に着任した大正 8 年は、第 2 代校長の幣原坦（1913 年 5 月 15 日～1920 年 4 月 28 日）の就任最終年であり、翌大正 9 年には第 3 代校長として吉田賢龍（1920 年 4 月 28 日～1934 年 6 月 8 日）が就任した⁽¹¹⁾。

大正 4 年 2 月、文部省令によって高等師範学校規程が改定され、予科を廃し、本科を 4 年とし、かつ本科を文科・理科とわけ、さらにそれぞれを 3 部に分割することとなった。「広島高等師範学校諸規則」によれば、以下の通りである。

文科——第一部（漢文）

第二部（英語）

第三部（甲部：法制経済 乙部：歴史地理学）

理科——第一部（数学）

第二部（物理学・化学）

第三部（博物学）⁽¹²⁾

また「高等師範学校卒業以上ノ程度ニ於テ精深ナル学修ヲ為サントスル者」のために⁽¹³⁾、「専攻科」を設けることができるようになっており、村岡着任の前年にあたる大正 7 年に、「国民道德、兼テ教育一般ニ関スル事項ヲ研究」という目的をもって⁽¹⁴⁾、「徳育専攻科」が設置された。徳育専攻科の設置趣旨は、幣原校長の「徳育専攻科宣誓式訓示」によれば、「堅実ナル国民的大精神ヲ開示」して、「国民教育ノ骨髓トナルベキ人々ヲ養成セントスルノガ、即チ今回創設セラレタル徳育専攻科ノ目的ニ外ナラヌ」ということである⁽¹⁵⁾。

専攻科の受験資格には、「一、高等師範学校、本科、文科、理科卒業者」、「二、内外国大学卒業者」、「三、高等学校卒業者」、「四、師範学校官公立中学校若クハ文部大臣ニ於テ徴兵令第十三条ニ依り、中学校ノ学科程度以上ト認メタル私立中学校ヲ卒業シ、又ハ之ト同等以上ノ学力ヲ有シ

テ師範学校中学校高等女学校ノ教員免許状ヲ有スル者」という四つのカテゴリーが示されていた⁽¹⁶⁾。設置初年度の入学者は、高等師範学校卒業者 14 名、内外国大学卒業者 3 名、翌大正 8 年度は、高等師範学校卒業者 12 名であり、上記の受験資格のうち、実際には「一、高等師範学校、本科、文科、理科卒業者」が入学者の大半を占めていた。

『尚志同窓会誌』第 33 号（大正 8 年 12 月 17 日刊）には「新任教官紹介」の欄があり、そこに村岡を紹介する記事が掲載されている。

先生は東京府の人、明治三十九年から早稲田大学の文科（哲学科）などに勤めて居られたが、本年五月母校に来られ、主として徳育専攻科の日本道德を受持たれてゐる。⁽¹⁷⁾

この記事からわかるように、村岡は主に徳育専攻科における日本道德の講義を担当したようである。当時の徳育専攻科の学科課程と授業時間数はおおよそ以下の通りである。第 1 学年では、日本道德（3 時間）、東洋道德（4 時間）、西洋道德および倫理学（3 時間）のほか、教育学・心理学・哲学・社会学・法政経済・国史を学ぶこととなっていた。第 2 学年になると、「日本道德及東洋道德ヲ主トスルモノ」、「西洋道德及倫理学ヲ主トスルモノ」、「教育学及心理学ヲ主トスルモノ」にわかれ、それぞれ受講する授業が決まっていた。村岡はこれらの授業のうち、主に「日本道德」を担当していたのである⁽¹⁸⁾。

『尚志同窓会誌』第 31 号（大正 7 年 11 月 30 日）に、「徳育専攻科の現況」と題する文章が掲載されている。村岡が赴任する半年前の状況を伝える記事である。

- ▲日本道德……春山先生担任、週三時間、既に序論を了へ、十月の始より本論に入り、我国道德の沿革まで進んで居る、同先生の案を口授、されど常に多数の参考書を指示摘発、生徒自学の資料を与へて指導せらる。
- ▲東洋道德……去る九月、愛知県第一中学校より新任せられたる服部先生担任、週四時間、専ら支那經書の研究、目下近思録と大学の思想研究中、やがて春秋、易、詩、書等に及ぶ順序、勿論同先生独特の研究は時々発表拝聴す。
- ▲西洋道德……西先生担任、週三時間、うち二時間はヘーゲルのフィロソヒー、デス、レヒトの紹介口授、一時間はデュヴェー及タフツ共著エシックスの研究指導、常に先生の蘊奥に接す。⁽¹⁹⁾

日本道德は春山作樹、東洋道德は服部富三郎、西洋道德は西晋一郎がそれぞれ担当していた。村岡が着任した大正 8 年時の道德に関わる講義を担当する教官は以下の通りである。

- 深田 藤次（修身、教務長、評議会評議員、研究科主任）
- 西 晋一郎（修身、哲学、図書館主事、評議会評議員、徳育専攻科主任、修身主任）
- 春山 作樹（教育学、修身、評議会評議員、教育学主任）
- 服部 富三郎（修身）
- 錦田 義富（修身、哲学、独語）⁽²⁰⁾

教育学の主任であり、日本道德を担当していた春山作樹が大正 8 年に東京帝国大学教育学部へ転任し、その後に村岡が日本道德を担当することとなったのである。

以上のように、村岡は広島高等師範学校において主に高等師範学校卒業者が入学した徳育専攻科での講義を受け持っていた。徳育専攻科の設置が広島高等師範学校の大学昇格をも見据えていたことをふまえると⁽²¹⁾、村岡が担当していた講義は一般の高等師範学校よりも、大学の

レベルに近い位置でなされていたということができよう。

2、広島高等師範学校における講義ノート

さて大正8年(1919)に広島高等師範学校に着任した後、村岡はどのような講義を行っていたのであろうか。「村岡典嗣講義草案関係年表稿」によれば、大正8年に「日本道德史―上世の研究―」「本居宣長之学説」「徳川時代教化概説」、大正9年に「日本道德史概論―上世の研究―」「古事記の研究Ⅱ」「源氏物語の思想」、大正10年に「日本道德史概論Ⅰ・Ⅱ」「神道史概論Ⅰ・Ⅱ」「プラトン・共和国の研究」「忠君愛国思想の発達」という講義が行われている⁽²²⁾。

表1は村岡典嗣文書に所収されている講義ノートと「村岡典嗣講義草案関係年表稿」で記された村岡の広島高等師範学校における講義との対応を示した表である。以下、順を追って概観しておきたい(「日本道德史」に関しては、次節を参照のこと)。

(1)「神道史概論」

村岡典嗣文書には、3種類の広島高等師範学校における「神道史概論」の講義ノートが現存している。これらの講義ノートについては『著作集』第1巻(神道史)ではほとんどふれられておらず、東北帝国大学における「神道史概論」が翻刻されている。そのため、現在でも広島高等師範学校における「神道史概論」と東北帝国大学における「神道史概論」の関係が明らかになっていないのである。

現存する「神道史概論」の講義ノートは、資料中の記述より大正10年～大正11年に行われたことがわかる。先述したように村岡は大正11年5月から欧州へ留学し、大正13年3月に帰国した後、東北帝国大学に着任したので、「神道史概論」は広島高等師範学校在任中の最終年度に行われた講義となる。また村岡は、東北帝国大学に着任した大正13年から大正15年度まで「神道史概論」の講義をしている。以上をふまえると、これらのノート類は広島高等師範学校から東北帝国大学へ異動となる間における村岡の学問形成を知るには格好の資料のひとつといえるだろう。

「神道史概論」(資料6)は、ノートの最初の頁に「神道史概論 初メノ部分ノ草稿」、右上部に「大正十年度講義草稿」と記されている。また3頁には「別冊に書き直し了る 大正十年五月 典嗣」とある。以上より、本資料は草稿段階のノートであり、別にかき直したノートが存在することがわかる。

「神道史概論」(資料7+資料5)には詳細な目次が記され、「大正十年四月ヨリ大正十一年三月ニ至ル。第三回訂正稿」とある。この記述をもとにすれば、少なくとも「神道史概論」(資料6)→「神道史概論」(資料7+資料5)の順序で成立したと考えることができ、「神道史概論」(資料7+資料5)はより完成稿に近い資料といえよう。

ここで「神道史概論」(資料7+資料5)の目次を概観しておこう。

序論

第一章 大古、上世、中世ノ概観

第一節 古神道トソノ発達

第二節 仏、儒トノ習合

表1 村岡典嗣の広島高等師範学校における講義

資料名	年代	内容	備考
1 源氏物語の思想	大正9年9月 ～大正10年3月	序論、第1章「恋愛観」、第2章「栄賀観」、第3章「仏教思想」、第4章「教養観及び道徳思想」、第5章「自然観」、第6章「結論」	教育専攻科講義ノート
2 日本道徳史 上世の研究	大正9年	序、第1章「上代道徳史」、第2章「太古ノ思想」、第3章「上世ニ於ケル道徳意識ノ発達」	
3 日本道徳史	大正10年～11年	序論、前編「日本道徳思想史ノ学問的性質トソノ研究法」、後編「上世道徳思想ノ研究」第2章「太古ノ道徳」序まで。以下資料5に続く。	徳育専攻科講義ノート 第3回草稿
4 日本道徳思想史概論	大正10年～11年	序説、第1章「前紀」(太古～戦国時代)、第2章「後紀」(徳川時代)、結語	徳育専攻科講義ノート 第2回草稿
5 神道史概論、日本道徳史 第二冊	大正10年～11年	神道史概論は資料7の続き。第6章「俗神道及ヒ教祖神道」、結論。日本道徳史は資料3の続き。第2章、第3章「上世前期ニ於ケル道徳意識ノ発達」。	徳育専攻科講義ノート 第3回草稿
6 神道史概論	大正10年	序論、第1章「古学神道ノオコルマデノ概観」。ノート後半は「PlatonノStautノ研究」。	講義草稿。
7 神道史概論	大正10年～11年	序論、第1章「太古、上世、中世ノ概観」、第2章「徳川前期ノ神道説」、第3章「古学神道」、第4章「古学神道ノ神学的発展」、第5章「古学神道ノ神学的発展 其ノ二」第4節の途中まで。以下、資料5に続く。	徳育専攻科講義ノート
8 日本道徳史—上世の研究	大正8年	該当資料なし	タイトル、年代は「村岡典嗣講義草案関係年表稿」による。
9 本居宣長之学説	大正8年	序説「伝記」、第1章「宣長ノ学問ノ概念ト研究ノ精神」、第2章「宣長学ノ形式的概観」、第3章「宣長ノ学説ソノ一 文学説ト語学説」、第4章「宣長ノ学説ソノ二 古道説」、第五章、第六章はタイトルなし。	年代は「村岡典嗣講義草案関係年表稿」による。
10 徳川時代教化概説	大正8年10月8日	緒論、第1章「朱子学ト貝原益軒」、第2章「元禄時代ノ古学」(記述なし)、第3章「国学ノ発達」(記述なし)、第4章「心学」、第5章(タイトルなし)、第6章「平田ノ祖先教」。	
11 古事記の研究Ⅱ	大正9年	該当資料なし	タイトル、年代は「村岡典嗣講義草案関係年表稿」による。
12 プラトン・共和国の研究	大正10年	資料6の後半部分に該当。	
13 忠君愛国思想の発達	大正10年	序論、第一章 近世以前ニ於ケル概観、第一節 太古、第二節 上世、第三節 中世以後、第二章 近世初期、第一節 文教ノ興隆ト忠君思想ノ淵源、第二節 初期ニ於ケル発達、第三章 近世中期、第一節 大日本史ノ修史、第二節 国学ノ由来ト発達、第四章 近世後期、第一節 竹内式部ト山縣大貳、第二節 本居宣長(記述なし)、第三節 寛政三士、第四節 水戸学(記述なし)、第五節 平田篤胤(記述なし)、第六節 平田派(記述なし)、第七節 水戸学ト平田学トノ比較(記述なし)、第八節 明治時代(記述なし)。	年代は「村岡典嗣講義草案関係年表稿」による。

第三節 (中世神道史ノ附録) 真宗ト天主教トノ神道説

第二章 徳川前期ノ神道説

第一節 序及ヒ儒家ノ神道説

第二節 吉川惟足ト度会延佳

第三節 垂加神道

第四節 史学的神道及ビ伯家神道

第五節 倭論語ニ於ケル神道思想

第三章 古学神道

第一節 古学神道ノ発生

第二節 古学神道ノ完成

第四章 古学神道ノ神学的発展

第一節 本居神道ノ内在的矛盾ト富士谷御杖ノ神道

第二節 服部中庸ノ三大考

第三節 平田篤胤

第四節 橘守部

第五章 古学神道ノ神学的発展 其ノ二

第一節 佐藤信淵ト大国隆正

第二節 六人部是香ト矢野玄道

第三節 鈴木重胤ト渡辺重石丸

第四節 南里有隣ト鈴木雅之

第六章 俗神道及ヒ教祖神道

第一節 俗神道

第二節 教祖神道ノ一、黒住教

第三節 教祖神道ノ二

結論

以上の構成は、大正13年～大正15年に行われた東北帝国大学における「神道史概論」と大きく異なるわけではないが、いくつか注意すべき点をあげておきたい。

まず神道史の時期区分である。本資料では、「第一期 太古」、「第二期 上世（大化改新運動カラ奈良朝ノ比）」、「第三期 中世（平安朝、鎌倉、足利時代）」、「第四期 近世前期（徳川中葉マテ）」、「第五期 近世後期（明治初年マテ）」の五期にわけられている。それに対して、東北帝国大学における講義ノートでは、「第一期 太古及び上世（奈良時代の終まで）」、「第二期 中世（平安、鎌倉、吉野、室町時代）」、「第三期 近世前期（江戸時代中葉まで）」、「第四期 近世後期（明治初年まで）」の四期にわけられている⁽²³⁾。

いまひとつは「俗神道」の範疇に入る人物である。本資料では、増穂残口、橘三喜、賀茂規清が「俗神道」として位置づけられている。これに対し、東北帝国大学における講義ノートでは、賀茂規清が近世後期の「宗派神道」に位置づけられ、また「俗神道」というカテゴリーは「神道の一般教化的運動」へと変化している。

さらに本資料の第一章第三節「(中世神道史ノ附録) 真宗ト天主教トノ神道説」では、浄土

真宗とキリスト教の神道観が述べられている。しかし、東北帝国大学における講義ノートでは、神道とキリスト教の交渉が中心的な論点となり、浄土真宗とキリスト教とを並列した記述はみられなくなる。

(2) 「源氏物語の思想」

この講義はノートの1頁をみると、「大正九年九月十八日開講——大正十年三月十二日講了」、「広島高等師範学校教育専攻科にて」と記されている（なお、この「教育専攻科」の記述は「徳育専攻科」の誤記とも考えられる）。以下、本講義の目次を記しておこう。

序論

第一節 解題及び概観

第二節 文学トシテノ性質ト思想史資料トシテノ意義

第一章 恋愛観

第一節 源語ニ描カレタル恋愛

第二節 源語ノ恋愛観

第二章 栄賀観

第一節 源語ニ描カレタル栄賀観

第二節 源語ノ栄賀観

第三章 仏教思想

第一節 源語ニ現レタル仏教

第二節 源語ノ仏教思想ノ特質

第四章 教養観及び道德思想

第一節 教養観

第二節 道德思想

第五章 自然観

第六章 結論。源氏物語ノ思想的底流

本講義のねらいは、恋愛観・栄賀観・仏教思想・教養観・道德思想・自然観を切り口として『源氏物語』を分析し、「日本思想史上ニオケル意義ヲ考ヘル」ことであつた。

また本講義に関連する資料として、村岡典嗣文書には「源氏物語研究資料 第一巻」（大正9年7月）、「源氏物語研究資料 第二巻」（大正10年2月）がある。これらは『源氏物語』に関係する資料・論文の抄録であり、前者は主に『源氏物語』の注釈・評論に関する抄録と論文に関するメモ、後者は「宿世」「阿弥陀仙」などのキーワードを主とした資料の抜き書きである。以上の資料は、この時期に村岡が『源氏物語』に関心を寄せていたことを物語る。

東北帝国大学に着任した後も、村岡は大正14年、大正15年に『源氏物語』の講読、昭和4年には「源氏物語と徒然草」の演習を行っており、『源氏物語』への関心が継続していたことがわかる。

(3) その他の講義ノート

「村岡典嗣講義草案関係年表稿」によれば、広島高等師範学校時代に「徳川時代教化概説」

(大正8年)、「本居宣長之学説」(大正8年)、「忠君愛国思想の発達」(大正10年)という講義が行われている⁽²⁴⁾。村岡典嗣文書にはこれらの講義と同じタイトルの資料が存在する。

「徳川時代教化概説」(資料10)は表紙に「大正八年十月八日」とあり、作成時期を推定することが可能である。また第二章「元禄時代ノ古学」の箇所には、「日本道德史第二ニユツル」と記されている。村岡が「日本道德史」というタイトルの講義を行ったのは広島高等師範学校在任中だけであるため、本資料は広島高等師範学校時代の講義ノートと推定することができよう。内容として注目すべきは、「第一章 朱子学ト貝原益軒」である。本章は村岡の朱子学に関する理解を示す数少ない記述である。

「本居宣長之学説」(資料9)はノートの表紙および中身に作成年代や広島高等師範学校の講義ノートとわかる記述はなく、現段階でこの資料は同学校における講義ノートと断定しがたい⁽²⁵⁾。

「忠君愛国思想の発達」(資料13)は、「序論」、「第一章 近世以前ニ於ケル概観」、「第二章 近世初期」、「第三章 近世中期」、「第四章 近世後期」という構成である。「第四章 近世後期」は全8節であるが、「第一節 竹内式部ト山縣大貳」を除く7節分(第二節・本居宣長、第三節・寛政三士、第四節・水戸学、第五節・平田篤胤、第六節・平田派、第七節・水戸学ト平田学トノ比較、第八節・明治時代)は目次に示されているのみで、具体的な記述は書かれていない。本資料にも村岡直筆の執筆年代や講義の場所に関する記載はなく、広島高等師範学校における講義ノートと断定することは難しい。

3、「日本道德史」について

表1にあるように、タイトルに若干の相違はあるものの、合計で3冊の「日本道德史」のノートが現存している。資料2「日本道德史 上世の研究」が大正9年度の講義ノート、資料4の「日本道德思想史概論」は大正10年度講義ノートの第2回草稿、資料3「日本道德史」と資料5の後半部分「日本道德史 第二冊」がひとまとまりであり、大正10年度講義ノートの第3回草稿である。これらの講義ノートは、東北帝国大学で村岡が行った「日本思想史概論」の講義以前の日本思想史に関係する通史的な見解を示す資料ということができる。



写真1 「日本道德史」(資料3)

「日本道德史 上世の研究」(資料2)は、表紙なしのノートで、1頁に目次が記されており、そこには「第二部 日本道德史 上世ノ研究」と書かれている。この記述によれば、第一部として何らかのまとまった原稿があったと考えられるが、現在のところその手がかりはない。現存する「第二部」は、「序 日本道德史ノ区画ト上代ノ範圍」、「第一章 上代道德史ノguillenトソノ批判」、「第二章 太古ノ道德」、「第三章 上世ニ於ケル道德意識ノ発達」という構成になっている。

また、同資料は東北大学附属図書館の封筒に収められており、その封筒に「大正九年五月未稿了」、資料の1頁の左上に「大9」、右上に「未定稿」と記されている。これらは『著作集』

編纂時における整理の際に書かれた記述と考えられる。大正9年の講義ノートということを示すのはこれらの記述だけであり、現段階では村岡の直筆で年代を確定することはできない。

「日本道德思想史概論」(資料4)は3部構成で、最初の部分が「序説」と記されている。この「序説」はさらに3つに分けられており、第1ではこの講義で扱うのが「日本国民ノ創造シタ道德的行為ノ歴史」ではなく、「道德的思想ノ歴史」であるとし、「道德的行為」ではなく、「道德的思想」について検討する意味を述べている。第2ではとくに「道德的思想」の発達について注目して検討を加えていくこと、第3では以上の立場から「日本道德思想史ハ徳川時代ノ初期ヲ分岐点トシテ前後ノ二期ニ大別シウル」とし、さらに前期を第一期(「道德的無意識ノ時代」)、第二期(儒教・仏教の伝来の時代)、第三期(大化改新から平安朝)、第四期(鎌倉・室町・戦国時代)と細分化して捉えていくことを述べている。以上の内容が横罫23行のノート7頁分に簡潔にまとめられており、その後に第一章として具体的な考察に入っていく。

「日本道德史」(資料3+資料5)は、「緒言」が「日本道德思想史概論」(資料4)と同形式のノート6頁分、その後に前編「日本道德思想史ノ学問的性質トソノ研究法」が80頁分におよぶ。その後に後編として具体的な考察が記されている。この後編の構成は「日本道德史 上世の研究」(資料2)と同様である。

しかし資料2・資料4と比較して明らかに異なるのは、前編「日本道德思想史ノ学問的性質トソノ研究法」という箇所である。いまこの箇所の概略を示すために、目次を挙げておこう。

前編 日本道德思想史ノ学問的性質トソノ研究法

第一章 文献学トシテノ考察

- 第一節 Philologie ノ学問的成立トソノ本質
- 第二節 我国ニ於ケル古学ノ一
- 第三節 我国ニ於ケル古学ノ二
- 第四節 我国ニ於ケル古学ノ三
- 第五節 我国ニ於ケル古学ノ四
- 第六節 結論

第二章 史的文化学トシテノ考察

- 第一節 学問ノ分類ト史的文化学
- 第二節 史的文化学ノ本質ト国民道德史
- 第三節 歴史的客観性

第三章 日本道德史ノ研究方法

序 研究方法ヲ考フルノ必要

- 第一節 研究資料ノ整理
- 第二節 研究資料ノ釈義及ヒ了解
- 第三節 研究ノ实际的態度

一瞥してわかるように、ここで述べられているのは研究方法である。村岡の方法論の代名詞といえる「文献学」について記され、客観的に日本道德史を研究する方法について述べられているのである。「日本道德史」の講義ノート類の中で、研究方法に言及しているのはこの資料のみであり、大正10年度の第3回草稿の段階になって村岡が自覚的に方法論を述べはじめ

たことを示している。ただし、先述したように「日本道德史 上世の研究」(資料2)には「第一部」としてまとまった記述があったことが推測され、「日本道德史」(資料3+資料5)の当該箇所がそれに相当する内容を有していた可能性も否定できない。

この講義ノートからは、村岡が並々ならぬ意気込みをもって講義に臨んでいたことを示す記述が散見される。「緒言」の冒頭は、以下のような記述からはじまっている。

開講ニ当ツテ一言スル。日本道德史ノ題目ノモトニ本学年ニ於イテ論スルトコロハ、ソノ学問的性質、研究法及ビ上代史ノ研究デアル。而シテ本講義ニ於ケル吾人ノ態度トシテハ、特ニSein wissenschaftlich トイフコトヲ力説シナケレバナラス。特ニ学問的性質ヲ論シ、研究法ヲ述ヘル精神モ又ココニ存スル。

村岡は自身がこの講義に臨む態度として「Sein wissenschaftlich」、すなわち科学的であることを強調している。そのために日本道德史の学問的性質や方法論について言及せねばならないというのである。

村岡のいう「学問的」とは、「往々ニシテ吾人ノ有スル traditional ナ preconceived notions ヲ脱シテ、直接ニ根本資料ニツイテ、公平ナ確実的ナ研究ヲ試ミルトイフ義」である。私たちにしみつく慣習的な先入見から脱却するために、村岡は「懐疑的モシクハ批評的態度」の必要性を説く。そして、こうした態度で日本道德史の研究を行う理由として、以下の3点を挙げている。

第一ニハ問題ノ性質上心理的ニモ感情的ニモ prejudices ガ伴ヒカチテアツタシ、又アルカラデアル。〔中略〕第二ニハ元来徳川時代ニオケルワカ国ノ自国研究カー方ニハ前ニ述ヘタ如キ学問的精神ヲ以テ為サレツツモ、他方ニハ儒仏等ノ外来文明ニ対スル反動カラオコリ、更ニ幕末中葉以後ノ対外関係ニモトツク時勢的特質ヲオヒテナサレタノテ、ソレノ学者ノ説カ authority トシテ、而モソノ学問的精神カムシロ看却サレテ、ソノ偏照的要素ニ於イテ遵奉サレタトイフノカ今日ノ学界ノ大勢テアルトイフコトデアル。〔中略〕第三ニハ日本道德史トイフカ如キ研究ハ真ノ意味ニ於イテハ殆ント前人未到ノ新境上テ、新タニ建設セラルヘキ学問テアルガ故ニ、特ニ之ヲ力説スルノ要ヲ見モノデアル。

ここでは日本道德史の研究を科学的・学問的態度で行わなくてはならない理由として、①自国の研究ゆえにひいきめに偏った評価をしてしまう傾向があること、②徳川時代の「自国研究」がともすれば外来思想への反動や特殊な時局に影響されて行われ、それが現在の学界にまで及んでいること、③日本道德史の研究が新たに構築すべき学問であることをあげている。さらに③に関しては、続けて以下のように述べられている。

日本道德史テフ概念ノ意義ニツイテハ講義ニ入ツテ精シク述フヘキカ、ソノ語ノ示ス如ク、日本ノ道德ノ歴史デアル。儒教史ヤ仏教史ノ単ナル延長トハ異ル。西村茂樹氏カ徳学講義ニ於イテ日本道德史トシテ徳川時代ノ儒教ノ発達ヲ概説シタノヲハシメトシテ、儒教史ノ著述ハ多少出テタガ、カクノ如キハ真ニ日本道德史トイフヘキモノテナイ。又日本道德史ハ単ニ我国ノ道德ノ学事的モシクハ實際的事象ニ関スル年代的記事テモナイ。換言スレハ道德学者ノ伝記ノ集成ヤ著書ノ解題又抜粹テモナイ。何等カ学問的統一アル研究テナケレバナラス。カク考ヘテクルト真ノ意味ニ於ケル日本道德史ノ研究ハ未ダ開拓セラレサル境地デアル。

村岡は自身の講義の目指すところが、儒教史、仏教史、伝記の集成や著書の解説・抜粋ではなく、ある一貫した視点からなされる研究であることを述べている。村岡が「真ニ日本道德史トイフヘキモノデナイ」という例としてあげた西村茂樹の『徳学講義』は、明治26年(1893)に刊行されたものである。同書の自序で、西村は次のように述べている。

古ヨリ道德ヲ説ク者、東西互ニ其説ヲ異ニシ、百家各其撰ヲ同クセズ。其間或ハ妄見邪説ヲ雑フル者ナキニ非ズ。初学ノ者漫然其書ヲ読ムトキハ、其選択或ハ当ヲ失ヒ、其講習或ハ順序ヲ誤リ、竟ニ道德ノ要領ヲ得ズシテ止ム者アラン。甚シキハ邪説ニ迷ヒテ畢生正路ヲ得ズ。自ヲ損シ、人ヲ損スルコトナキヲ保チ難シ。是ニ於テ自ラ固陋ヲ揣ラズ。東西古今ノ書ニ就キテ其萃ヲ抜キ要ヲ摘ミ、順序ヲ整ヘ、統紀ヲ正シ、後生ノ為ニ道德ノ大意ヲ講説セントス。⁽²⁶⁾

ここでは古今東西のさまざまな書物を抜粋し、その要点をおさえて、道德の大意を述べようとしたことが語られている。このような「東西古今ノ書ニ就キテ其萃ヲ抜キ要ヲ摘」む態度とは異なる地平を村岡は目指していたのである。

こうしたさまざまな書物の概要を取捨選択し、知識として供給するという講義とは異なることを強調しつつ、村岡は「緒言」の末尾で以下のように述べている。

以上ノ考察ハ自然ニ吾人カ講義ノ性質ト諸君カ聴講ノ用意トヲ規定シ指示スルモノガアル。新ナル学問ヲ根本的ニ建設シヨウトイフノテアルカラ、勿論ニハカニ又一人ノ力ヲ以テ完成ヲ期スヘキテナイ。随ツテ吾人ノ講義ハ必然的ニ研究ノ方法ニツイテ重キヲオカネハナラヌ。methodeハ学問ニ於イテ最モ重要ナ基礎テアル。学問的ナmethodeノ上ニ成立サレタ知識ニシテハシメテ学問的性質ヲ要求シウル。而シテ諸君カ聴講ノ用意モ又単ニ既成ノ知識ヲ受入レルトイフ態度テナクテ、ドコマテモトモニ能動的ニ研究スルトイフノテアラネバナラヌ。相トモニスル真理ノ探求、ココニ凡テノ学問ノ意義ハ存シ、又学問教育ニオケル講義ノ意義カ存スル(講義ハ百科全書的知識ヲ与フルヲ目的トセヌ)。要スルニコレ研究的ノ一語ニツキル。

この講義は教官から知識を一方的に受け入れるものではなく、聴講者が自ら主体的に研究する態度を求めるものであり、それは一言でいえば「研究的」ということである。村岡は学生に対して受動的な態度ではなく、研究的な態度をもって講義に臨むことを求めていたのである。ちなみに当時の東北帝国大学は、学内外で「研究」を重視ないし尊重する大学として認識されていた⁽²⁷⁾。以上のような村岡の「研究」を重んじる態度は、奇しくも後に着任することとなる東北帝国大学の理念や学風と軌を一にしていたのである⁽²⁸⁾。

結びにかえて

本稿では、村岡典嗣文書(東北大学史料館所蔵)所収の未刊資料である広島高等師範学校における講義ノートについて概観してきた。最後に本稿で述べてきたことをまとめ、若干の展望について言及しておきたい。

現在、村岡の学術論文は岩波書店刊行の『研究』に収録され目にすることができる。また講義ノートも、東北帝国大学における講義ノート類は創文社刊行の『著作集』によってその内容を知ることができる。しかし、広島高等師範学校における講義ノートは『研究』・『著作集』に

は収録されておらず、その内容を知る手がかりは皆無といってよい。本稿はこれらの資料の概要を紹介したにすぎないが、東北帝国大学における講義につながっていく内容とともに、それらにはみられない相違点もあり、村岡の学問形成を考える上で示唆を与えてくれる資料であることを確認した。

村岡が自分の専門分野に近い日本道德史や神道史を講義することができる広島高等師範学校という環境に異動できた意義は決して小さくない。事実、村岡はこの時期に平田篤胤研究史における金字塔ともいえる「平田篤胤の神学に於ける耶蘇教の影響」、さらには「橘守部の学説」、「古神道に於ける道德意識とその発達」、そして欧州留学中に「南里有隣の神道思想」と次々に論文を発表していった。それと併行して、広島高等師範学校において日本道德史、神道史概論といった日本思想史の通史や個別宗教史につながる講義を行っていたのである⁽²⁹⁾。このような広島高等師範学校時代の業績が村岡典嗣の学問形成においていかなる意味をもっているのかという問題を解明するためには、今後さらに東北帝国大学時代の諸資料や広島高等師範学校時代以前の諸資料と詳細な比較検討を要する。村岡の学問形成を明らかにするために、広島高等師範学校時代の講義ノート類は必要不可欠である。

また村岡典嗣研究、近代における日本思想史研究という視点から目を移して、広島高等師範学校の歴史という観点からみても、大正8年～大正10年頃、徳育専攻科でいかなる講義が行われていたかという実態を知る上で、本稿で紹介した一連の資料は多くの示唆を与えてくれるであろう。

【付記】

- ・ 広島高等師範学校関係資料の調査に際し、小宮山道夫准教授をはじめ広島大学文書館の教職員の皆様にさまざまな便宜をはかっていただいた。末筆ながら謝意を表したい。
- ・ 引用資料には適宜句読点を付し、新字体を通行の字体に改めた箇所がある。
- ・ 本稿は科学研究費補助金・基盤研究（C）「戦時下の帝国大学における研究体制の形成過程とその実態に関する研究」（代表：吉葉恭行）による成果の一部である。

注

- (1) 村岡の生涯に関しては、部分的ではあるが池上隆史氏による詳細な年譜がある（「村岡典嗣年譜」（1）～（4）、『日本思想史研究』34・35・37・38、2002年・2003年・2005年・2006年。また「村岡典嗣年譜―東北帝国大学文化史学第一講座着任から日本思想史学会成立まで―」（上）・（下）、『年報日本思想史』2・3、2003年・2004年）。
- (2) 村岡典嗣文書所収の未公開資料の一部は、『季刊日本思想史』74「村岡典嗣：新資料の紹介と展望」（2009年）を参照。同誌を編集した段階では2009年7月には公開予定としていた。しかし諸事情により資料整理作業が遅れ、史料館での公開に支障をきたした。こうした公開の大幅な遅れについて、東北大学史料館をはじめご迷惑をおかけした方々にこの場を借りて深謝しておきたい。
- (3) 『著作集』第1巻の巻末には、村岡典嗣著作集全10巻の構成が示されている。なお、昭和23年7月に出版企画がたてられたときは、全12巻構成の予定であった（『著作集』1・220頁）。近年では前田勉氏によって『研究』・『著作集』の中から精選された『日本思想史―村岡典嗣論文選―』（平凡社、2004年）、村岡の主著である『本居宣長』（平凡社、2006年）がまとめられ、より簡便に村岡の著作にふれられよ

うになっている。

- (4) 『研究』・『著作集』に収録されていない村岡典嗣文書所収資料の概略に関しては、拙稿「村岡典嗣文書とその周辺」(『季刊日本思想史』74、2009年)を参照。また未刊資料の一部も、『季刊日本思想史』74(2009年)に解説・翻刻されているのであわせて参照されたい。
- (5) 池上隆史「村岡典嗣年譜(四)」(『日本思想史研究』38、2006年)。
- (6) 高橋禎雄「村岡典嗣著増訂版『本居宣長』をめぐる二、三の問題—昭和2年自筆原稿の分析を中心に」(『近代史料研究』5、2005年)、また昆野伸幸「村岡典嗣の中世思想史研究」(『季刊日本思想史』74、2009年)。
- (7) 「広島大学二十五年史編集室旧蔵資料目録(その一)」(『広島大学史紀要』1、1999年)、「広島大学二十五年史編集室旧蔵資料目録(その二)」(『広島大学史紀要』1、2000年)。
- (8) 広島文理科大学・広島高等師範学校『創立四十年史』(広島文理科大学、1942年)55頁。
- (9) 『創立四十年史』57頁～58頁。北條時敏は、東京大学理学部を卒業後、山口高等学校教授、山口高等学校長、第四高等学校長を経て、広島高等師範学校長に就任した。
- (10) 『東北大学百年史』10(東北大学、2009年)・274頁。
- (11) 『創立四十年史』・28頁～32頁。この時期について、『創立四十年史』は「校勢伸張」とし、行政整理に伴い生じた高等師範学校の廃止問題への対応、普通教育振興運動の展開の第一歩として目指された高等師範学校の大学昇格問題などに言及している。
- (12) 『広島高等師範学校一覧 自大正八年至大正九年』(広島大学文書館所蔵)
- (13) 『広島高等師範学校一覧 自大正九年至大正十年』(広島大学文書館所蔵)
- (14) 同上
- (15) 『尚志同窓会誌』30(広島大学文書館所蔵)。
- (16) 『広島高等師範学校一覧 自大正九年至大正十年』(広島大学文書館所蔵)
- (17) 『尚志同窓会誌』33(広島大学文書館所蔵)
- (18) 『広島高等師範学校一覧 自大正九年至大正十年』(広島大学文書館所蔵)
- (19) 『尚志同窓会誌』31(広島大学文書館所蔵)
- (20) 『広島高等師範学校一覧 自大正八年至大正九年』(広島大学文書館所蔵)。なお德育専攻科主任の西晋一郎は、村岡を広島高等師範学校に招聘する提案者の一人であった(池上隆史「村岡典嗣年譜(四)」、『日本思想史研究』38、2006年)。
- (21) 『創立四十年史』・203頁～204頁。
- (22) 『著作集』4(創文社、1961年)・618頁～619頁。
- (23) 村岡の時代区分をめぐる諸問題については、昆野注(6)前掲論文を参照。
- (24) 『著作集』4(創文社、1961年)・618頁～619頁。
- (25) 同資料の解説と部分的な翻刻は、高橋禎雄「〔翻刻〕村岡典嗣筆『本居宣長之学説』」(『季刊日本思想史』74、2009年)を参照。
- (26) 日本弘道会編『西村茂樹全集』第2巻(思文閣出版、2004年)。
- (27) 東北大学の理念と学風に関しては、拙稿「「研究第一主義」小考—『東北大学五十年史』をめぐって—」(『東北大学史料館紀要』3、2008年)、「理念と学風」(『東北大学百年史』3・第1編、東北大学、2010年)を参照されたい。
- (28) 池上隆史氏の「村岡典嗣年譜」によれば、大正9年8月30日、大正10年6月5日付で村岡の東北帝国大学法文学部教授に内定したことを伝える波多野精一の書翰が紹介されている。前者は波多野から河合譲宛書翰、後者は波多野から村岡宛書翰である。また、東北帝国大学法文学部の初代学部長となる佐藤丑次郎からの村岡宛書翰(大正10年7月5日)も紹介されている。こうした事実をふまえると、村岡が「研究」を重視する内容を盛りこんだ「日本道德史」(資料3+資料5)を執筆した時期に相前後して、東北帝国大学への招聘という事態が浮上していたことがわかる。
- (29) 『著作集』4「後記」では、村岡の講義の歴史を第1(大正8年～昭和5年)、第2(昭和6年～昭和13年)、第3(昭和13年～昭和18年)、第4(終戦後)と4期にわけている。そして第1の時期を「研究序論の凡その構成と同時に、特殊通史—宗教交渉史、神道史、史学史、文学史の通史が開展された時期」と解説している。しかし、方法論、神道史の捉え方において、大正8年～昭和5年の間に共通点および相違点があることは本稿で述べた通りである。いま一度各時期の講義ノートや論文をつきあわせて、村岡の学問形成を跡づけていくことが必要であろう。